



### 同窓会はどこへ

昭和二十九年卒  
石田 弘 (元会長)

本校創立以来、定時制課程は八十年の輝かしい歴史がある。その母校が来年三月の卒業式をもって閉校となる。時代の流れとはいえ惜別の情ひと潮である。その上同窓会まで解散するとは何か心にひっかかる。ところが昨年『同級生のゲストブック』と称する、松原智子(赤星)先生作、ホームページの開設を知り、これぞ『ともかき』の継続する方策を秘めたものと先生に感謝したい。

昭和二十九年卒業、子育ても終わるころ、五十周年記念行事の案内を頂き、無性に母校が恋しくなった。友人たちと参加した、その時富川孝恭氏を知り、石関力太郎先生、中村十成先生に口説かれ、四組の友と同期会を開き同意を得て、男女共学一期生の青葉会々長を引受けた。その時の条件は、一、毎年同窓会を開催する。一、『ともかき』発行。一、全会員名簿の充実。一、北原奨励賞の継続。以上四項目の約束をした。行事の後青葉会を引き受けたが、

資金は底をついていた。再度同期会に資金支援を要請、『ともかき』に多くの広告を依頼、バザー用品を多量に寄贈してくれた、佐藤道雄氏、阿久津眞次氏、毎年の会場設営と料理調達担当の平田福正氏、旧制の方々から多額な寄付と支援、それには鳴戸錦子先輩の会員名簿の充実と会計実務担当者のお陰、恩師北原安門先生と奨励賞の件、石関先生担任の五百川武会長は三十年間の世話人、六十周年に若林明弘先生赴任、二十年間の世話人、歴代の多くの先生方ご指導ありがとうございました。

今後の同窓会のことは、若月会長と相談の上、決定したいと存じます。



### 思い出を皆さんと共に

昭和四十一年卒  
五百川 武 (前会長)

母校三田高校定時制に入學し、また卒業して一生懸命に過ぎた事も振り返る事無く、生きて来て、今、一息ついて振り返って見ると、これまで人生長いようで短く感じてなりません。

今まで、何をやって来たのかと思うと、さて何をやって来たのでしょうか。

三田高校定時制も、時代と共に少子化が進み学生の数が激減。

やむなく東京都の方針で閉校せざるを得なくなりました。

学生時代の数々の思い出は今だに昨日の事のように思い出され、それは卒業生皆さんも同じではないかと思えます。

又、卒業時には同窓会青葉会の存在も知りませんでした。

川会長の際に、「同窓会の活動に参加してみないか」とお声をかけて頂き、それ以来今日迄、時の校長先生始め、顧問の先生方のご協力、卒業生の皆さんと同窓会の活動を続けてまいりました。学校の閉校と記念行事、

又同窓会の今後等問題も残されております。

新聞ともかきのご案内にありますように、来年の三月八日(土)是非ともご都合をお付け頂き、閉校式・又お別れパーティにご参加下さいますようお願いしております。



### 三田高校の思い出

昭和三十四年卒  
富川 美智子



思い出は六十二年前に遡ります。昭和二十年五月二十五日、空襲警報と共に、四国町に住んでおりました私達家族(母、六才になったばかりの私、妹四才、弟三才)は芝公園方面へ避難しました。母が私達の為に布団を取りに家へ戻った直後に焼夷弾が墜ち、私達は隣家のおばさんに励まされ、増上寺の通りを母の言い付けを守ってお米一升づつを背負い、見えるもの総てが真赤に化し、火が捲き起す赤い風の中を只々逃げました。六才の時のあの凄まじい光景は、消すことの出来ない戦争体験となりました。幸いにもはぐれた母とは翌日三田高校(第八高女)の雨天体操場で無事を確かめ合うことが出来ました。

焼け出された私達に追討ちをかけるように父の戦死の報が入り、苦勞に苦勞を重ねながらも、幼子三人を愚痴一つこぼさず育ててくれた亡母に、女性の本当の強さを教えられました。

その後奇しくも三人共が、働きながら三田の定時制で

学ぶことになりました。そして生涯の伴侶であり、無二の親友であった亡主人と邂逅することが出来ました。在学中は主人共々、生徒会、クラブ活動に力を注ぎ、お仲人の佐藤先生をはじめ、真摯に接して下さった忘れ得ぬ先生方、多くの友人との思い出詰まった濃密な四年間でした。

卒業後は微力ながら同窓会に携わり、三十年記念の鈴木清太郎先生指揮の演奏会は強く胸に刻まれています。五十周年記念を機に会長を亡富川がお引受けし、石関先生、熱心な役員の皆様と「青葉会」と命名、会則の改正、ともかきの復刊そして記念行事を遂行出来ましたことは懐かしい思い出です。

それから歴代の会長さん、役員の方々のご尽力で、記念行事、総会が今に続いておりますこと、同窓会の一員として感謝の気持ちで一杯です。閉校は寂しく思いますが、私にとって三田高の思い出は閉じることはありません。